

「日本文学における怪異」共同研究グループ

清泉女子大学日本語日本文学会

共催

清泉女子大学人文科学研究所

〈公開シンポジウム〉

日本文学における死と救済

——怪異の視点から——

〈パネラー〉 藤井由紀子（本学准教授、中古文学専攻）

藤本勝義（青山学院女子短期大学名誉教授、本学非常勤講師、中古文学専攻）

姫野敦子（本学准教授、中世文学専攻）

藤澤秀幸（本学教授、近代文学専攻）

〈司会〉 佐伯孝弘（本学教授、近世文学専攻）

シンポジウムの趣旨と概要

佐伯孝弘

我々の研究グループによる公開シンポジウムも今回が三回目である。本学日本語日本文学科には怪異や、怪異・幻想に関係の深い分野を専門とする研究者が多く所属している。本学に非常勤講師として何年も御出講下さっていた藤本勝義先生（『源氏物語』の「物の怪^け」研究の大家）にも加わって頂き、「日本文学における怪異」をテーマとする共同研究グループを立ち上げたのが、四年前である。専門の時代・分野を異にする研究者が揃っている強みを活かし、日本文学における「怪異」について、時代とジャンルを越えて総合的に考究するのが狙いである。

幸い日本学術振興会の科学研究費補助金（平成二十三―二十七年度、「日本文学における「怪異」研究の基盤構築」（基盤研究（C）、研究者代表は藤澤秀幸先生））を受けることができ、「怪異」に纏わるテーマの研究、具体的には公開シンポジウムの開催と発表内容の公刊を行って来た。最初のシンポジウムは平成二十三年十月二十九日に「日本文学の怪異——信じる？ 信じない？——」という題で行い、その発表内容を『清泉文苑』二九号（平成二十四年三月、本学人文科学研究所刊）に各人が活字化した。次は平成二十四年十月十三日に「日本文学における怪異と猫」という題で行い、その発表内容を『清泉女子大学人文科学研究所紀要』三四号、平成二十五年三月）に各人が

活字化した。御興味のおありの方は、是非当該号に当たられたい。

そして三回目の今回は、平成二十六年十月二十五日に本学1号館一四〇教室において、「日本文学における死と救済」という題で行った。このテーマを選んだ理由は、〈死〉と〈救済〉は共に、仏教などの宗教と文学との関わりや、文学に表れる人々の死生観などを考察するのに恰好の枠組みになり得ると考えたからである。当日司会役だった私から、パネラーの各先生の御発表要旨とその後の質疑応答につき、以下御発表順に簡略に紹介する（敬称は「氏」に統一）。

藤井由紀子氏は「火車」を見る者たち——平安・鎌倉期往生説話の死と救済——という題で御発表。『更級日記』等を例に、阿弥陀信仰の浸透によつて死後來世の極楽往生こそが〈救済〉と信じられるようになったことを、また『発心集』等を例に、死期に「魔」によつて往生が妨げられるかもしれないという恐怖も、人々は抱いていたと思われることを指摘された。更に、死期に死者を地獄へ連れて行く「火車」（鬼が引く火の車）に注目。日本では『今昔物語集』辺りから文学作品に描かれ始める火車の原初的イメージを中国伝来の仏典等の中に辿りつつ、火車が往生を妨げる〈罪〉の象徴として描かれているのではないかと述べられた。

藤本勝義氏は『源氏物語』における死と救済という題で御発表。『源氏物語』中で物の怪に憑依される人物（夕顔・葵の上・紫の上・女三の宮・浮舟）と、死後に亡霊として夢枕に立つ人物（桐壺院・藤壺・柏木・八の宮）の描かれ方を俯瞰した上で、「仏教的な追善・供養のみならず、生者の心からの弔いが死者を救済する」、且つ「亡霊として夢枕に立つことは、往生できていないことの表れと取れる。死者の往生は物語中に明記されていないものの、死後誰の夢にも現れないことにより往生したことが示唆されている」と結論付けられた。

姫野敦子氏は、「鶴」は救済されたのか——夢幻能の様式と脱様式——という題で御発表。まずは能の「夢幻能」や「修羅能」などについて、その技法・演出・演目や歴史の変遷につき概観。その上で特に世阿弥作の夢幻能

の一つ「鶴」を取り上げられた。同作は有名な頼政の鶴退治を、鶴の立場から描いたもの。シテの鶴は頼政に射られたことを「君の天罰」と述懐し、自らがうつほ舟に押し込められて川に流された汚名を語り海に消える。氏はシテが往生できたか否か曖昧なまま終わらせる描き方に注目され、「敢えて作者は結末を曖昧にしている、シテの往生への願いを描きつつ、往生の可否は見る者の解釈に任せているのではないか」とされた。

藤澤秀幸氏は「幸田露伴・泉鏡花における死と救済」という題で御発表。初めに、幸田露伴と泉鏡花の作品が、「芸による救済」という共通性を持つことを述べられた上で、二人の作中の〈死と救済〉の意味を考察。露伴の『対鶴』『土偶木偶』の生前叶わなかった願望が死後に実現される〈救済〉、鏡花の『化鳥』『朱日記』の謎の美女に助けられ死なずに済む〈救済〉、鏡花の『夜叉ヶ池』『海神別荘』の死後異界へ行き幸福になることの〈救済〉と、〈救済〉の種々相を紹介された。近代に入り、〈死と救済〉の関係が多様化することが指摘された。

当日は本学日本語日本文学科学学生をはじめとして多くの聴衆が来て下さった。各人の発表後のフロアも含めた質疑応答では、藤井氏に対しては〈火車と猫との結び付き〉につき、藤本氏に対しては〈中古・中世の物語における夢の意味〉につき、姫野氏に対しては〈世阿弥と浄土教の往生思想との関連〉につき、藤澤氏に対しては、〈「救済」とは何を指すのかという定義〉や〈伝統的な仏教の往生思想と露伴との関連〉につき質問があり、やり取りがなされた。

本誌に掲載の各氏の論文はいずれも、当日発表の内容に更に増補や一部訂正を加えたものである。御発表の詳細は是非それぞれの方の論文を御覧頂きたい。

なお、当日は韓国の高麗大学校民族文化研究院研究教授の高永爛先生も御参加下さり、フロアより発言して下さい。我々「日本文学における怪異」研究グループと本学人文科学研究所は、高麗大学校民族文化研究院と共催で、来る本年五月十六日（土曜日）午後一時より本学1号館一四〇教室において、「文学における〈死と救済〉——東

アジアの怪異の視点から——」というテーマで公開シンポジウムを開催する。今回のテーマを発展させたもので、高麗大学より複数の研究者をお招きし、朝鮮の民俗や宗教における〈死と救済〉について御発表頂く予定である。日本側の日本文学の領域の発表と合わせ、広く東アジアの視点からの刺激的なシンポジウムになることを期待している。学内・学外を問わず奮って多くの方々に御参加をお願いしたい。(事前のお申し込みは不要です。詳細については後日大学ホームページに掲載予定。)

【付記】本研究(シンポジウムでの口頭発表及び本誌掲載の論文)は、平成二十六年日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))「日本文学における「怪異」研究の基盤構築」による成果の一部である。



会場の様子



司会とパネラー